

頭脳循環を活性化する若手研究者派遣プログラム平成 22 年度派遣報告書

派遣国：インド

平成 19 年度入学
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
5 年生
飯田 玲子

1. 自身の研究テーマについて

本研究は、「都市文化」の生成について明らかにする。その際、現在西インド・マハーラーシュトラ州の代表的な芸能に成長しつつあるタマーシャー劇に注目して分析をおこなう。

タマーシャーは、1980年代に至るまで、村落空間を中心として、小作農民男性を相手に上演されるものであった。上演される内容も、風刺劇やエロティックなコメディ、恋愛を題材としたいわば世俗的な歌やダンスを行ってきたため、神話劇などに端を発する他のインド芸能に比べて「低俗、野卑な芸能」として認知されてきた。都市部（ムンバイ、プネー）にもタマーシャー専用劇場はあったものの、それは村落からやってきていた一部の労働者のみを相手にしていた。しかし、1990年代以降に入るとタマーシャーは「都市」に進出し始め、大きく変容を遂げ、現在では、マハーラーシュトラ州を代表する芸能として認知され初めている。

例えば、これまで下層の農民男性や労働者の人々だけが鑑賞するものとして位置づけられ、そうした人々の間でしか演じられてこなかったものから、誰にでも開かれた劇場での公演へと大きくシフトしているし、それにともない都市のライフスタイルにあった上演時間（ビジネスマンやマダムの訪れやすい時間）に変化している。

また、これまでラヴァニを担う女性達は売春婦と同一視されてきたため、ラヴァニの踊りは下品なものとして位置づけられてきたが、現在では習い事としても受け入れられ始めている。さらに、タマーシャーの動静や有名女優の一挙手一投足が現在公共的な関心事になっており、新聞や様々なメディアでも報じ

られるようになっている。これは、タマーシャーやラヴァニに対する位置づけが、大きく変化していることを示しているといえる。こうしたタマーシャー劇の変容は、どのように捉えることが可能であるか。また、「都市文化」としてどのように作り直されているのかを明らかにする。

2. 派遣の内容

2011年3月21日～30日の9日間、インド、マハーラーシュトラ州のムンバイおよびプネーにて、史料収集と参与観察をおこなった。

ムンバイでは、ムンバイ大学の図書館及び、National Centre for Performing Arts(NCPA)の資料室で史料収集をおこなった。また、ムンバイ大学の民俗芸能講座にて、参与観察および簡単なインタビューをおこなった。

プネーでは、プネー市内の Bal Gandharv 劇場および Aryabhushan 劇場にて参与観察をおこなった。

3. 派遣中に印象に残った経験や体験

報告者がタマーシャーの研究をおこなうことに関して、これまでは快く思っていなかった人々（例えば、「何故あんな芸能を研究するのか？他の良い芸能や文化を研究しなさい。」といった発言。）が、タマーシャーの認識を少しずつ変え始めたことが印象深かった。タマーシャーの評価を変えた契機が何であったのかについては、次回のフィールドワークでインタビューをおこなう予定。

4. 目的の達成度や反省点

今回のインド滞在の主な目的は、ムンバイ大学での資料収集および、民俗芸能講座での参与観察であった。特にインタビューに関しては、講座設立の経緯や受講者、講師のバックグラウンドなどの情報を集めることができた。

しかし、滞在期間が短かったため、受講者一人一人へのインタビューなどを行うことはできなかった。次回（7月中旬から8月末を予定）滞在中での、民俗芸能講座での参与観察許可を得ることができたので、講座受講の目的やきっかけ、親族関係などを含めた、詳細なインタビューをおこないたい。

5. 2011年度の派遣における課題と目標

2011年度は、4月～9月初旬までロンドン大学東洋アフリカ学院 (SOAS) で、

9月中旬～11月末まではインドの社会発展研究所を拠点として、2012年1月～3月までは、再びロンドン大学東洋アフリカ学院にて **Stephen Hughes** 氏の指導を受けながら、インドにおける「都市文化」の生成に関する研究を進めたい。